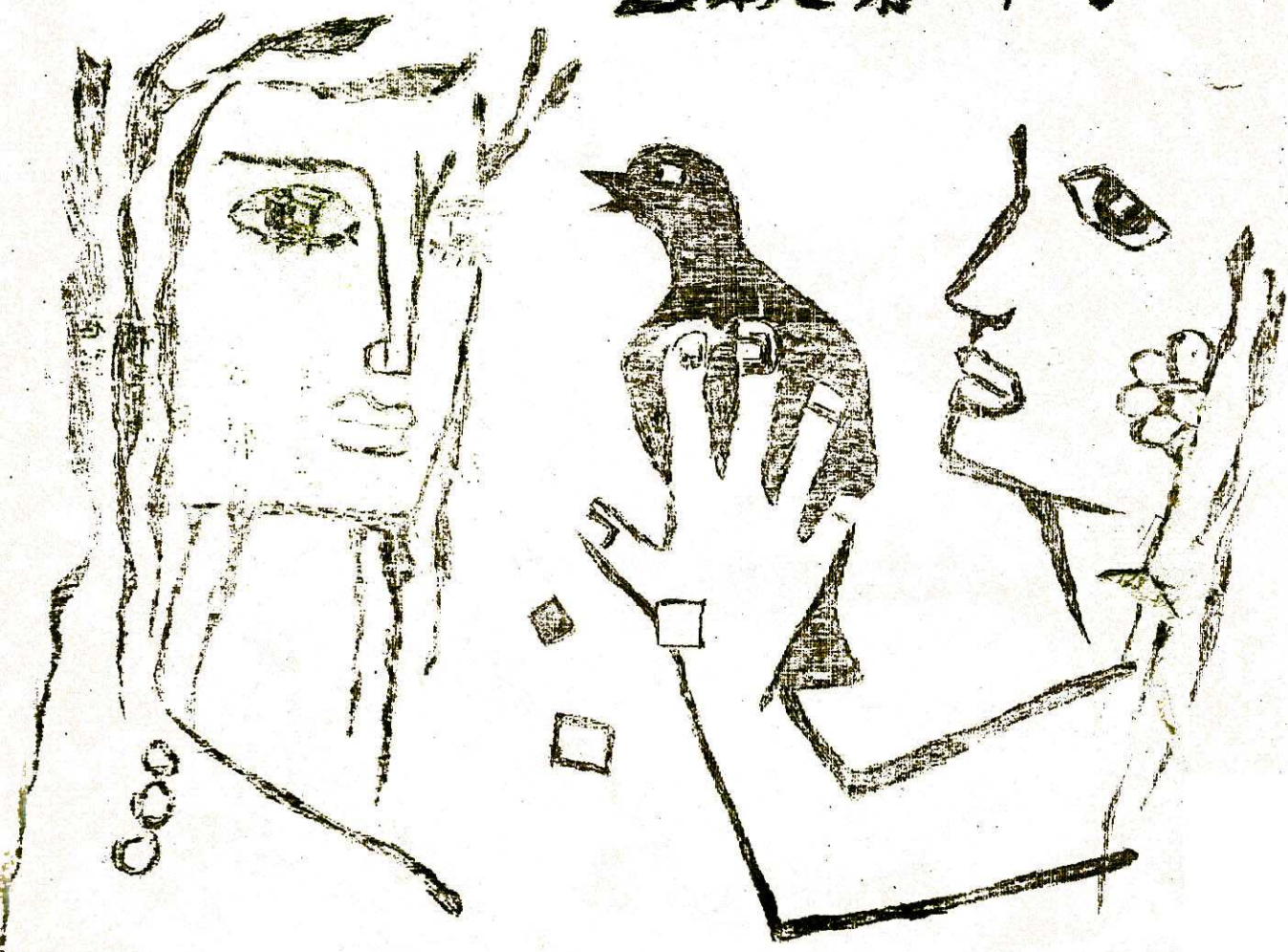
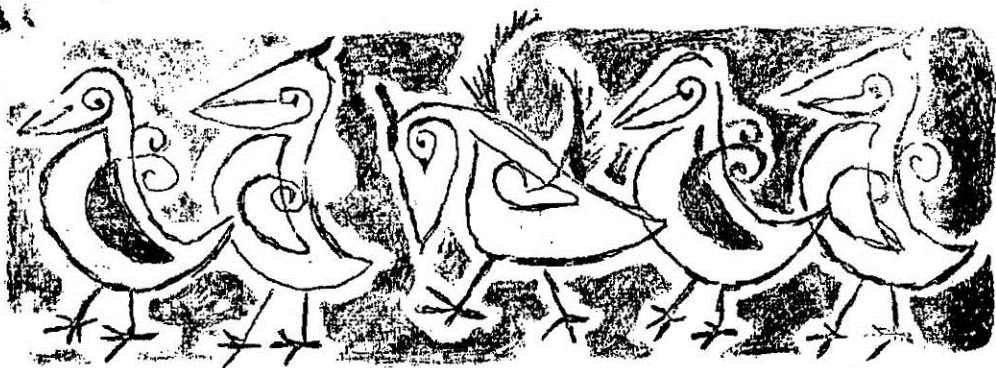


からっかぜ

会報第4号



劇団 からっかぜ



芸術は長く人生は短かし

目次

次

表紙



図案 伊藤陽造
題字 兼子正之

巻頭言

1

新春雅感

アソビや演劇の今日の問題

新村正男・6
中村正興・13

● 特集記事 ●

私は何をだました

ヨシダ・カツミ・2

劇画のうまれ

三周年後の回想記

編集部・10

三十四会費について

編集部・16

吊りスポーツの嘆き

兼子正之・12

私の一年間の意欲

南陽正広・3

おたよりありがとう

編集部・9

郷土の歴史

木下忠・8

切捨

編集部 4



芸術は長く人生は短かし

我々の人生というものは本善に短かい、しかし芸術の道は他の多くの道と同じ様に、先へ進むに従つて段々険しく太くなつていく。それにもかかわらず何処まで行つても絶えてしまふというのではない道である。そこには、常に広大な未知の世界が存在している。芸術の行く手にある世界、それは短かき人生を持つ我々にとつては寂寥である。

演劇と云うすばらしい芸術の場において、進んで寂寥の道に歩んでいこう。

会報「からつかぜ」が多くの友を呼ぶ、我々劇団の一つのつながりのほか何ものでもない。

なかむら、まさおき。





私は皆をだました

——三十円会ヒについて——

よしだかつみ

昨年木塚鉄食堂で総会が開かれた。そこでは、石川、新村、南陽、中村等の詩人が活発に意見を述べあつていたが、その主たる話題は、風土のこれからの方向、つまり「風向き」のことだった。この「風向き」は大きく分けて二つの方向になつてゐた。一つは素人劇団（どちらかというと劇団というよりもサークル）もう一つは職業劇団である。こうはつきり云つてしまうと、大体職業劇団なんかになれるのか、という人があるが、年々新しい人を迎へ技術的にも精神的にも豊かになつてくると、普通云う難しいもの、大がかりなもの、高級なものをやりにくくなる。そこでお礼を貰うようになり、その利益を少しでも各人のポケットに入れれば既に職業劇団の入口にあると思う。素人

の場合は全然違つたものになる、自分の好きな芝居の仕事をする為に自分で金を出してやる。公衆のやり方にしても、会全体の力を出し切つてキャスト、スタッフの最善を揃えて美事な芝居を作る必要はない。要はどんな仕事でもその人がやってみて何か得るものがあればよいと思う。

これら二つの立場はどちらといつては、私とりにくい。私は大体後者の立場をとる。しかし遠鉄会議は結論を得ないまま、年が明けそしてずる／＼そのまゝで行きそうになつてゐた。そこで私はたま／＼フツと思つた三十円会にで後者の立場をとりせようと思つた。会ヒが三十円ともなれば会員が或る程度増えても経済的に大したことは出来ない。その上安い会ヒで増えた人員を会員として抱えてやつて行くにはどうしても素人性を抜けることは出来ないだろうという訳だ。

今一つは昨年中頃から考へてゐた我々老人組の処置についてだが、やめた奴は勝手にやめさせる。又は卒業生だけで後援会を作る特色々考へたが、どうも名案が浮かばないのでもう暫く時料を待つということ。現状維持に決まりかけてゐた。この時、さつき云つた三十円会ヒを思いついた訳だ。休んでゐる人には月百円では

大變だが三十円なり出して呉れるだろう。減った分の会には芝居をやる前二、三ヶ月に分けて特別会を払う、という訳だ。

金を沢山出した人が沢山仕事をすると一見奇妙な考えも、もともと素人だという事を考えれば、奇妙どころか反って正當な筈だ。この考えは今の、凡々にある習俗出来てゐる教少い長所の一つでもある。そして、我々老人組としても年三百六十円出すことで一年間の発言権を保有出来るし、廿五の時も何の遠慮も要らない（公演の時を除き）という次第で三十円説を提出し總會で決議して貰った訳だ。

この案通過のおかげで、各人の連絡、意志疎通、その為の会報活動の強化等、中心になつてわつて行く人の仕事がずんと増えること、それを急げば直ぐ会が行きまづつて潰れることも考えられぬこともない、つまり益々苦勞が増え、我々老人組はゆう／＼サボることになる——結局皆をだましたことになるんだらうか？



私の一年間の意欲

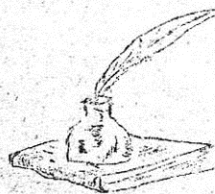
南陽政広

昨年一月十五日郡田公演が私の参加した初公演である。しかも入団後五日目に「村の保守党」の抜擢しという大役？を新参者の私めに仰づけられた。単に役者とタイミングを合せて役を上から下へと落す、これだけの事ながら公演日迄の五日間というものの不安の念を抱き続けた。それが何故か今振り返つて見ると、なまの空気が実に和やかで今にも何かしでかしそうな、そして希望にあふれてゐる私にとつては新鮮な空気が、そんな空気が私の意欲をそゝらせた。しかしその意欲は己れの心底から湧き出たものでなく周りの空気がそうであるから己れも何となくそうなつてしまつた——この気持ち、当時の不安が、私の心裏を掠めていた因であつた。そんな不安も公演終了一、二週間後には十年も昔であるかのようになつた。私の感じた新鮮な空気が、不安から安心感、気易さ、そして心底からやるむいという意欲が体内を充満させた

。しかしこの意欲も後先を見ぬ学生気の抜けないものだと云う事が二ヶ月後の昇進という仕事で気付いた。単に演劇をやるのではない。サークル演劇の本質、社会の中での人と人との繋り、サークルの運営等私なりの考へ方の基盤を造り出さねばならない。それと同時に対社会、対人との面に於ける考へ方の心要性を痛切に感じた。これら新しい意欲が私の行動面に於て曲りなりにも少しづつ現れ始めた。しかしサークル運営という問題だけは正直のところ当時の私には手も足も出せないものであった。というよりまだそれだけの力が私自身なく、又その時期ではなかった。少くとも二、三年後に初めて名実共にその時期到来を考へていた。しかし三ヶ月間の昇進終了と共にサークル運営の問題がこれの袖に火がついたごとく迫つて来た。からつかぜの基礎を築き上げた人達が一人去り二人去りと、抜けていった。形式的にはそのような人達は休団と云う形をとつてあるが実際には抜けている。基礎を作った人即ち中心になつていた人達が抜ける事はいうまでもなく若手にその手を協す事を意味をしている。又その人達も私共にしきりに「後をたのむぞ」と、まるで一生帰らぬ人のように云う。それを聞く毎に私は、私に課せられた問題のいとぐちすらつかんでいないのに、今からこんな事を云われては……と再び不安と

寂しさの念にかつれた。そんな時私は、こんな事ではいけない！先輩達がやったんだから後進にだって出来ない事はないと。それから私のからつかぜでの考へ方、行動等常に次の代は我々の手にうつるんだ！いや半分は今もう我々の手の上にのつているんだと自分の身にその意欲を置いた。

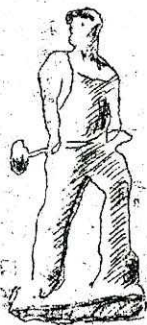
このような考へ方の基に新しい問題が再び表れた。からつかぜ内部組織、対外的な問題である。内部の問題については、人員の事、進め方等一番身近な問題を考へ、それをどう打開してゆくか内部の人達ともいろいろ話し合ひして共に考へた。そのいとぐちすら握えず芸術家も終り、その年も残りわずかとになり、からつかぜの進退を見るべく総会が厚鉄食堂に於て開かれたが、残念な事には不調に終つてしまった。そこで、Yさんの三十月説が出され、からつかぜの会員制が実施される事になつたことは、今後のからつかぜの発展と共に私達に課せられた振心の問題打開のいとぐちをつかむ事が出来たまた新しい意欲を生み出す事が出来た。



そよかぜに演劇の社会的意義と云う、ちっぽけな文を書きました、その最後の文に「民衆に演劇を理解してもらう、これが私達（から）かぜに与えられに当面の使命だ」と書きました。何んの内容を弄ちなし勉強不足の私が演劇をちよつとかじつただけでこうぬけ／＼と大きな事を書いた事をばすかしく思います。この事は後日、もう一度たしかめて改めて行きたいと思います。

私はから／＼かぜの演劇そのものを云うのではなくして、これを押し進めて行く私達の能度又は現実の社会を形成している一人の人間としての生き方について、私達は深く考えて見る必要があるのではないだろうか。現実の社会を肯定出来ないと言ふ考え方に立つ以上（大衆の）一人一人何筆かの理想を抱いて居るはずで、その願いが平和であれ、幸福であれ、楽しみであれ、ともかく大衆の抱く理想は共通なものがあるはずで、これら肯定出来ない社会において、から／＼かぜが演劇と云う芸術をどう大衆に受け取ってもらうか、演劇は民衆と共に大衆の中に、とある劇団がその主張の基に、芸術的使命をはたして居る事は皆さんよく知って居る事と思います。演劇における主、それは何々の人間の主張であると思います。それなら、から／＼かぜ一人一人の自伯の意識はどうでし

ようか、何々に返せばある名前をいたいた高級なりクレエーション的考えか一部あるものでないだろうか。（私達の演劇は民衆貴族以外の人を庶民といたしました。現実の大衆に行動する人、資本家以外の人々の物でなく、わならないと思います。そして食しき者と共に進んで行く物がなくてはならないと思ひます（一この食しきは意識上の）私はこう云う難点に立つた場合、この大衆から目をそらす出来ません。そしてこの物に厳しい探求の目をそそがすには居られませんか。ここから演劇を勉強に取つて行かぬばならないと思ひます。から／＼かぜで観客に喜んでもらえばそれで良い」と云う声を聞きます。この考えは、キケンだと思ひます。私達の演劇を見ても喜んでもらう事は結構ですが、もっと大切なものを見のがすおそれがあるのではないだろうか。



新春雜感

新村正男

昭和三十四年の新春を迎え 本年も鷲津本興寺に於て合宿に皆と共に楽しく過した。正月と云えば何か俗な娯楽にひたりがちである。實際正月と云う言葉自体がそれを連想するのに充分である。からっかぜが一つにまとまって、規律をもった生活をする事は非常に有意義である。

兎に角、こゝは事を云わなくても、一つの屋根の下に共に寝起きする事は非常に近親感をいだくものである。唯からっかぜが一つに集う事だけでなく、そこに柔しい雰囲気が生じてくるものである。

今年の合宿は去年と違い、これと云うに目的がはっきりしたので、その成果があやぶまれたが今にはつてみれば、やってよかったと云う気持ちでいっぱいである。実行委員の計画も比較的スムーズに運んだ様である。そして、その計画が勉強の余暇の誤乗性に配慮している事も非常に良かったと思う。この合宿を通じて感じた事は、からっかぜの前途に何か明るい光明を見出した事である。それは今までのからっかぜと云うものが、草分け時代の

開拓者によってその親骨が組まれていた感があった。ところが今度の合宿に於てはまったく新人の活躍するところとなった。からっかぜを自分達だけでも結構育てあげていく事が出来ると云う自信が強く感じられた。誠に立派な事である。古きものより新しきものに進化していくこのにくましいエネルギーを彼等は持つていたのである。この事はけっして古い人達の存続の不要を解くのでは決してない。

劇団の最も必要とする事は人間関係の和である。古きも新しきも和合し、そこに各々の興味以上のものが出せれば良いのである。一プラス一が二になることである。そしてこの基本の動機となるものは、新人達の斬新さではなければならぬ。人が変れば雰囲気も変っていく。これを良い方向へ持つていかねばならぬ。からっかぜの一人一人が新年と共に認識しようではないか。



秋

峰 岡 タタシ

柿の赤いのが秋だって？

夕日がきれいだからだって？

木の葉が散るからそうだって？

虫が鳴くからなのだって？

ほんと??? ほんと?? ほんと？

うそじゃはいだらうってさ

1/3

或る人の戯言

人生は満足と云う事はない。欲望と不安が常に覆いかぶさっていてこれを解決せんと願い、これを解決したと思われて安堵の息をすれば、次の欲望と不安が待ちかまえている。ここで人間はある欲望を満足させようと努力して、休息なく終るのが人間の一生であろうか。しかし私は常にこんな事を考える事がある。人間は常に何かある目的に対して働きかけ目的を果さうとしている。この目的が果せるまでのものが、困難である時と容易である時がある。後になって反省すると、困難であった時を対比すると、一番印象に残るのは困難な時の事である。(未完)